

教師の心理

四方実一

教師についての心理学的研究課題の中心は、子どもの指導者として教師は如何にあるかである。それは、学校教育では教師の職的機能が指導にあるからである。しかしこの問題は、教師の人格性がいかにあるかの問題と通ずるものであり、教師の精神衛生、職業的資質、人格的特性などの内容を内部課題としなければならぬ。

また現実には教師の指導力が如何なる効果を發揮しつつあるかの評価の問題も教師の心理として取りあげるべき問題である。今日問題となつてゐる教師の勤務評定は、教師の評価の問題であり、教育行政の見地から一方的に取り上げる問題でなく、教師の心理としての重要問題である。次に指導者としての教師、教師の職業的資質、人格的特性、精神衛生などについて述べよう。

1 指導者としての教師

教育学では、教師は児童・生徒の人格性の発達を助けるもので教育の主体であり、児童・生徒はその客体であるという。この両者の

相互関係で教育が推進され、教育の主体は教師であるが、時に親であり、児童、生徒の仲間であることもある。しかし、学校教育で、最も指導的役割を果すのは教師である。

指導的地位にある者は一般に、客体に対して大きな影響を及ぼしている。指導者の如何によつて、その影響が如何にあるかは心理学的な研究対象となる。教師の場合は特に学校という組織の一部であり、一定の社会的要求によつて教育を進め、その領域はかなり限定されたものであるにかかわらず、教育の効果が大きく左右される。

指導者としての教師は、子どもの親や、仲間と異つた自覚した指導者である。またかなり長期にわたる子どもとの接触をし、その役割を意識して行動するもので、一時的、臨時的のものではない。

また家庭における指導者である親は、養育の責任を感じ、進んで指導の役割を演じるものであり、例外はあるが一般的に子どもに信頼された指導者である。しかし親は指導を専門とする職業でもなく、指導理念、計画性は極めて主観的である。

学校の教師の仕事は一定の指導理念、計画性に基いて行動する一つの職業である。しかしこの教師は親や子どもの自由に選択したものではない。子どもの側からみれば与えられた指導者である。学校選択の自由は義務教育ではほとんど無いといえる。一部私立、国立付属のような学校はあっても、希望者を全部入学させることはない。高校でも地域制をとる地方ではコースの選択は出来ても、住所によって学校は規定される。

また学校の教師の誰に指導されるかは一方的で、教師選択の自由は保護者、子どもにはない。しかし現実の問題として学習意欲の盛んな児童・生徒には、親以外の指導者が必要であり、教師に特別のことがない限り彼等の指導者として信頼され、承認される。

指導者として信頼され、承認されている教師であることは、教師自身の教職に対する自覚をうながすことになる。指導者としての教師の職業的資質、人格的特性が問題として取り上げられるのもここにその根拠がある。

2 教師の職業的資質

良い教師とはいかなる資質をもつ者であろうか。人格的特性は後に述べるとして、先ず職業的資質は何か。教師の職業的資質は、今日の教育機能の分析をなし、これが最も理想的に営まれる場合に、教師はいかなる資質でなければならぬかによって決定されよう。

教師の職業を効果的にするために、教師に要求される基本的な資質

があれば、この資質を身につけることは教師にとって絶対的に必要なものといえよう。

わが国の教師養成研究会は次のような資質をあげている。

- 一、教育の目的を正しく理解し、教師としての誇りをもっている。
- 二、教育に関する知識について、深く、かつ広い理解をもつ。
- 三、生徒の生活をじゅうぶん理解して、これを正しく指導しうる能力をもっている。

四、生徒の個性を科学的に調査し、診断し、洞察して、個別的に指導しうる。

五、教科に精通し、自信をもって学習を指導しうる能力をもつ。

六、教育の方法に精通し、教育的機知に勝れている。

七、学級及び学校の経営の能力をもつ。

八、教育効果の評価を適正におこないうる能力をもつ。

このように分析された資質は、どの一つをとっても、教師の職業上不可欠のものである。この資質はまた教師たらんとする者の修めべきものである。

この資質はまた教師の項目と一面一致し、良い教師決定の目標となり、教師採用の基準、現職教育の目標として教育行政上にも重要な意味をもつ。

3 教師の人格的特性

望ましい教師の人格的特性はいかにあるべきか。この問題は教師

の心理学的研究として重要なものである。教師も人間である。人間として立派であることが教師として望ましいことは云うまでもないが、人間であるからには長所もあり、短所もある。しかし教師として特に必要な人格性の最少限度がいかにあるべきかの研究も必要である。逆に云えば、こんな人格的特性をもつ人は教師としては望ましくないといえる限界の研究が必要である。

この人格的特性は教師の評価基準であり、教師の自己評価、自己修養の目標ともなるものである。

教師の人格的特性の研究にはいくつかの方法がある。

一、教育の理想から教師はかくあるべしとする見方

二、成功せる教師の人格像の分析的探究

(逆に望ましくない教師の人格像の分析)

三、児童・生徒の方から見た教師の人格

教師の人格的特性の研究は、このようにいくつかの観点からおこなわれる。例えば、阪本一郎氏が、東京都下の小・中・高等学校長一五〇名に、それぞれの学校で第一等の教師一―二名を選び、その特性を記述させた研究がある。いまその特性について述べてと、

一、教育に直接関係のある特性(教育に対する情熱、指導力が優秀

など) 二八、六%

二、職務遂行に關係ある特性(責任感、勤勉、計画的性など) 二〇、

八%

三、社会的特性(協調、公平無私、礼儀態度など) 一五、八%

四、知的特性(研究的、一般的教養、教科の知識など) 一四、七%

五、性格的特性(明朗、円満、反省的など) 一一、三%

六、身体的特性(健康、身だしなみなど) 六、八%

七、環境的特性(教育的経験のゆたか、家庭無事など) 一、三%

また児童・生徒に好かれる教師の人格的特性の調査も多くある。例えば上武正二氏は「あなたはどんな先生が一番好きですか」の問を小学一年から高校三年までだして、その答を整理している。

この結果、人格性に関するものは全体の五六、九%で、学年が上になるほど多く関心をもっている。その内容は(1)やさしい、(2)ほがらか、(3)親切、(4)親しみやすい……などである。

教師の人格性が児童・生徒にとつていかに彼らの社会的適応と学習の要求を満足させているかがわかる。以上教師の人格性の研究の一部を示したが、この問題は教師の人格性と児童・生徒に及ぼすその影響の關係について心理学的研究が必要である。

4 教師の精神衛生

教育の成果はまた教師の身体的、精神的な健康によって大きく左右される。しかし教師も一個の社会人であり、現実の生活には多くの悩みや不満がある。特にわが国の現在の社会や経済状況は、教師たちが自己の理想と信念を押し進め、実現してゆくにはあまりにも障壁や難関が多い。教育が他の職業に比し、未来の理想に希望をつなぐものであれば、それだけそこに起るフラストレーション的事態

は深刻と言えよう。

教師の精神的健康についての研究は種々の角度から研究されている。それは前述の教師の人格的特性の研究の場合とどうようである。筆者の大学研究室でも一昨年から教師の不満と悩みについて協同研究をし一部学会にも発表している。

この内容は

- 一、教職の本質についての悩みや不満
 - 二、教育環境についての悩みや不満
 - 三、個人生活についての悩みや不満
 - 四、教職体験の問題
- である。

以上四項目のうち次に示すのは第二の教育環境についての悩みや不満である。この項目は(一)対児童・生徒に関するもの、(二)職員間に関するもの、(三)地域社会に関するもの、(四)学校機構に関するものがある。

次にこの結果について略述しよう。

児童、生徒に関係するものについてみると、第一表のようであり、指導技能面の悩みは男女ともに多い。

これは教師が指導面に如何に留意するかを示すものである。特に自己の指導技術の面に自信の持てない教師が多く、また、今日の教育で最も強調される個を生かす教育の困難及び集団教育の悩みが第二の質問に現われている。

No1. 対児童、生徒に関するもの

	問題番号	質問内容	男女	%
指導技能	①	自分の指導技術や能力について	男女	73.3
			男女	70.4
	②	学級指導上取扱いにくい子どもについて	男女	71.7
			男女	64.8
③	生活学習や問題解決学習の進め方について	男女	57.8	
		男女	50.8	
④	政治的内容を含む教材の取扱いについて	男女	42.8	
		男女	26.8	
身体性格条件	⑤	児童に接するときの自己の性格について	男女	44.9
			男女	40.4
	⑥	自己の性格や方針の児童に対する反映の不安	男女	30.5
			男女	36.8
	⑦	指導上での自己の身体、容姿言語などについて	男女	23.0
			男女	35.8

身体及び性格条件の悩みは三〇%から四〇%をしめ、⑤の性格については「短気、怒りっぽい、寛容性を欠く、神経質」などの悩みをうったえる者が多い。

以上は児童、生徒に対する教師の悩みの一端であるが第二表は職

No.2 職員間に起る悩み

	問題番号	質問内容	男女	%
上下関係	①	校長、教頭、主任との教育上の意見の対立	男女	38.0 27.6
	②	年代や世代のちがった先生との意見の対立	男女	46.5 36.4
	③	校長や教頭の指導的手腕についての不満	男女	38.5 34.4
同僚関係	④	同学年、同教科の担任同志間で「ウマ」が合わないで	男女	16.6 21.6
	⑤	職員室で近くに座っている先生と気が合わないで	男女	10.7 9.6
	⑥	異性教官との関係で	男女	6.4 5.2
	⑦	職員室の雰囲気や職員会議について	男女	47.1 43.2
信任	⑧	他教員と趣味、教養、学歴、資格などがくいちがって	男女	27.3 27.6
	⑨	同僚に対する校長や教頭の信任のしかたについて	男女	29.9 35.2
	⑩	他の先生に比して自分の事務分担が不公平なので	男女	27.3 18.0

職員間に起る悩みである。教師は学校組織の中にあつて、校長、教頭につかえ、同僚と協力して教育に従事しなければならない。この職員間の人間関係における悩みはまた、教育の実際活動に大きく影響する。

上下関係のうち②の世代間の不満としてあげられているものは約四〇%あり、その中で対年上の者に対し「考えかたが古くて、新しい教育へのセンスがない、事なかれ主義で教育的情熱に欠ける」と評する者が多く、年下に対し「朗らかだがアブレ的だ、権利ばかり主張して責任感がない」などが多い。

同僚関係では、⑦に対する不満が多く、その内容は「職員室の空気によそよそしさ、職員会議の非民主的運営」を訴える者が多い。教師の職場は必ずしも満足な雰囲気といえない。

校長、教頭の職員に対する信任も約三〇%の者が不満としている。特に事務分担が不当に自分に重いことを男教師は訴えている。

第三の調査は対地域社会に関するもので、結果は第三表である。対保護者関係では、その家庭状況についての悩みが非常に多く、その内容は、

No.3 対地域社会に関するもの

	問題番号	質問内容	男女	%
対保護者	①	保護者との教育方針のくいちがい	男女	41.7 33.6
	②	教育上保護者の家庭状況について	男女	73.3 63.6
	③	保護者の教師に対する批判やうわさについて	男女	13.9 16.6
対校下	④	校下の有力者、P・T・Aとの関係	男女	16.0 11.2
	⑤	校下の特色	男女	35.3 26.0

No.4 学校機構に関するもの

	問題番号	質問内容	男女	%
勤務関係及び事務	①	自己の学校の教員の定数	男女	60.4 43.6
	②	自己の学校の児童数	男女	50.3 50.4
	③	学校事務や学級事務	男女	53.0 46.4
施設指導	④	学校の教材教具, 設備	男女	80.7 79.2
	⑤	教育委員会や指導主事と学校との関係について	男女	42.8 20.8

家庭の貧困からくるものが圧倒的で、放任家庭がこれに次いでいる。新しい教育に対する家庭の理解と協力が未だ大きな問題として残っているといえる。

校下ではP、T、Aに対する悩みは比較的小さいが、校下の特色として、校下の封建性をあげている。例えば、排他的、ボスの存在、事なかれ主義が多い。

今日の学校教育が地域社会との関係を重視するところからくる悩みといえよう。

第四の調査は、学校機構に関するもので、男女とも不満や悩みは非常に多い。

教員の定数、学級の児童生徒数の問題は今は教育行政上重大視されているが、約半数の教師がこれを訴えていることは注目に値する。また学校、学級事務に対する不満も多いのは、教師が学級、学科の教育に専念することができないからである。

また設備、備品に対する不

満は、今日の進んだ教育を実施しようとすることから起るもので、教育財政上の問題といえよう。指導機関については、指導主事に対する不満が多く、現場での身近な指導を求める声も最も多い。これも教師の教育熱に対する行政機関の不完全を物語るものである。

以上調査の一部を述べたが、教師が教育現場でこのような不満や悩みをもっていることを明らかにした。この不満や悩みが、教師の人格性の深層にあって、彼らの教職活動を如何に規定しているかの過程を明らかにする必要がある。

教師の精神的健康については、今後あらゆる角度から研究され、ここ起る問題は、教育行政、教育財政、成人教育、P、T、A活動などによって解決されなければならない大きな問題である。

以上教師の心理学的研究の一部について述べたが、教師の評価について問題が残っている。この問題は、教師の心理全般に関するものであり、別の機会にゆずることにした。

(京都学芸大学)

× × × × ×

× × × × ×